
ビルの「L」と「M」

浅川太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビールの「L」と「M」

【著者名】

浅川太郎

【あらすじ】

新幹線でビールを注文し

(前書き)

また、新幹線にお乗つ季節だなと感こもしたもので

まだまだ景気のよかつた頃であろう。

真夏、お盆の前後、下りの新幹線自由席に僕はジーパン姿で乗っていた。

僕の車両の前のドアが開き、販売員（まあ、綺麗な部類の女性）が台車とともににはいってきて、飲み物を薦めた。

僕の数席先のサラリーマン風がビールを頼んだ。

彼女は彼に「L」と「M」のサイズを聞いた。

僕の横を通る彼女にビールを注文した。

彼女は黙つて「L」をよこした。

話としては、以上である。

博多に着き、旧友と久しぶりに会い、以上の話をした。

俺の顔にや、「呑ん戻え」とでも書いてあるんか、馬鹿にしやがつて、とかげりぢり笑いながらネタとしてしゃべって盛り上がった。

だが、美人の販売員に先入観からか知らないが、妙なラベルを貼られたのかもしないなど、コンマ以下のパーセンテージだが悲しくも思った。

このあたりのことを、ネット上の友人エ〇君に語つたら賛同してくれた。その友人は言葉に纖細だったのでお付き合い願っていた。

その「悲しい」感覚は、神経レベルであり、やはりエ〇君なら判つてくれたかという印象。

それからひと季節が過ぎ、彼には十日にして一度くらいの頻度で打電してたのだが、返事がまったく来なくなり、調べるとフォローされていなかつた。

何が原因かは判らない。違うチームの野球ファンといふことも考えられないこともない。

僕ら、小説を書きたいと思う者は、最大公約数を狙うのが、先ずは一般的であろう。

そして、たまには神経レベルや、細胞レベルの話もしてみたい。

でも、細胞レベルで共感して読んでくれた方々に、これからも先もずっと読んでいただけれかといふと、それは別問題と構える必要もありそうだ。

(後書き)

どちらかと言つて、後半が言いたかったことかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789z/>

ビールの「L」と「M」

2011年12月19日11時55分発行